國學院大學学術情報リポジトリ

『楚辭補注』譯注稿 (三十五)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 剛大, 今瀬, 英一朗, 名越, 健人, 曹, 喆翔, 井上, 黎 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000229

『楚辭補注』譯注稿（三十五）

楚辭卷第四
九章章句第四
抽思

〔本文〕

（1）心鬱鬱之憂思兮、
（2）獨永歎乎增傷。
（3）思蹇産之不釋兮、
（4）曼遭夜之方長。
（5）悲秋風之動容兮、
（6）何回極之浮浮。
（7）數惟蓀之多怒兮、
（8）傷余心之**慢慢**。
（9）願**搖**起而横奔兮。
（10）覽民尤以自鎮。

心 鬱鬱として憂思し、
獨り永歎して傷みを増す。
思ひ 蹇産として釋けず、
曼として夜の方に長きに遭ふ。
秋風の容を動かすを悲しむ、
何ぞ回の極ることの浮浮たる。
蓀の怒り多きを數へ惟ひ、
余が心を傷ましめて**慢慢**たり。
願はくは**搖**起して横奔せんことを。
民の尤めらるるを覽て以て自ら鎮む。

（11）結微情以陳詞兮、　微情を結んで以て詞を陳べ、
（12）矯以遺夫美人。　矯（あ）げて以て夫の美人に遺（おく）る。

〔通釋〕

心はふさがり憂いつつ思い、ひとりいつまでも嘆いて悲しみを増す。思いは乱れもつれて解けず、ちょうど秋の夜長にあい、つくづく長いのを感ずる。秋風が草木の姿を変えてしまうのを悲しむ。なんと風のめぐって吹いてくることの定めなさよ。香ぐわしきわが君のあまりにも怒りやすいのを、いくたびとなく思い返しつつ、わが心を痛ませ憂い続ける。遥か遠くに走り、思いのままに奔り、いそいで君の所に赴こうと願ったが、民衆の罪なくしてとがめにあっているのを見て、みずから思い止まり、とるに足らぬこのこころを詞につづりのべ、捧げてあの美しい君に贈ろうと思う。

〔洪興祖補注〕

（1）〈心鬱鬱之憂思兮〉

哀憤結**綃**、慮煩冤也。一無「心」字。

〔訓讀文〕

哀憤結**綃**して、慮り煩冤するなり。一に「心」の字無し。

〔語釋〕

○結**綃**――心が乱れて、気が塞ぎ結ぼれ続けること。○煩冤――憤懣の遣る方ないさま。

（2）〈獨永歎乎增傷〉

哀悲太息、損肺肝也。

〔訓讀文〕

哀悲太息して、肺肝を損なふなり。

〔語釋〕

○肺肝――内心、心の中を指す。

（3）〈思蹇產之不釋兮〉

心中詰屈、如連環也。

〔訓讀文〕

心中詰屈すること、連環の如きなり。

〔語釋〕

○蹇產――曲がりくねるさま。○詰屈――ここでは心が乱れて錯綜していることを指す。○連環――いくつも連なった輪。ここでは思いが絡み合って堂々巡りであることを指す。

（4）〈曼遭夜之方長〉

憂不能眠、時難曉也。

〔訓讀文〕

憂へて眠る能はず、時　曉け難きなり。

〔語釋〕

なし。

（5）〈悲秋風之動容兮〉

風爲政令。動、**搖**也。言風起而草木之類**搖**動、君令下而百姓之化行也。一本云「悲夫」。

〔補曰〕九辯曰、「悲哉秋之爲氣也。蕭瑟兮草木**搖**落而變衰。」意與此同。

〔訓讀文〕

風を政令と爲す。動は、**搖**なり。言ふこころは、風起ちて草木の類 **搖**動し、君令下りて百姓の化 行はるるなり。一本に云ふ、「悲夫」と。

〔補に曰く〕九辯に曰く、「悲しいかな、秋の氣爲るや。蕭瑟として草木 **搖**落して變衰す」と。意 此れと同じ、と。

〔語釋〕

○化――教化や感化され、良くも悪くも変化が起こるさま。ここでは君令が民に悪い影響を与えることを指す。○悲夫――悲嘆にくれること。夫は語気助詞。秋風が人を苦しめることから悪政を悲しむことを指す。『六臣註文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）巻二十九「雑詩上」「古詩十九首」に、「白楊 悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す（白楊多悲風、蕭蕭愁殺人）」とある。愁殺は憂いの極地に至らしめる意。○九辯曰――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻八「九辯章句第八」に同文あり。○蕭瑟――秋風が吹き抜けるさま。また物寂しいこと。

（6）〈何回極之浮浮〉

回、邪也。極、中也。浮浮、行貌。懐王爲回邪之政、不合道中、則其化流行、羣下皆效也。

〔補曰〕極、至也。詩曰、「江漢浮浮。」浮浮、水流貌。此言回邪盛行、猶秋風之**搖**落萬物也。

〔訓讀文〕

回は、邪なり。極は、中なり。浮浮、行く貌。懐王 回邪の政を爲して、道の中に合せざれば、則ち其の化 流行し、羣下 皆效ふなり。

〔補に曰く〕極は、至るなり。『詩』に曰く、「江漢 浮浮たり」と。浮浮は、水の流るる貌。此れ言ふこころは、回邪 盛行すること、猶ほ秋風の萬物を**搖**落せしむるがごときなり、と。

〔語釋〕

○回邪――不正かつ邪でひねくれていること。○詩曰――『毛詩正義』（十三經注疏）巻十八 大雅 蕩之什「江漢」に同文あり。

（7）〈數惟蓀之多怒兮〉

數、紀也。蓀、香草也。以**喩**君。蓀、一作「荃」。

〔補曰〕數、所矩切、計也。惟、思也。言計思其君多妄怒、無罪而受罰也。

〔訓讀文〕

數は、紀なり。蓀は、香草なり。以て君に**喩**ふ。蓀は、一に「荃」に作る。

〔補に曰く〕數は、所矩の切、計（はか）るなり。惟は、思ふなり。言ふこころは、其の君の妄怒多きを計り思ふは、罪無くして罰

を受くればなり、と。

〔語釋〕

○蓀――ハナアヤメのこと。

（8）〈傷余心之慢慢〉

慢、痛貌也。言己惟思君行、紀數其過、又多忿怒、無罪受罰。故我心**慢慢**而傷痛也。

〔補曰〕**慢**、音憂。說文云、「愁也。」

〔訓讀文〕

慢は、痛む貌なり。言ふこころは、己 君の行ひを惟思し、其の過ちを紀數し、又忿怒多く、罪無くして罰を受く。故に我が心 **慢慢**として傷痛するなり。

〔補に曰く〕**慢**、音は憂。『說文』に云ふ、「愁なり」と。

〔語釋〕

○忿怒――憤怒すること。○說文云――『說文解字注』（上海古籍出版社）巻十九「心部」は、「**慢**」を「悳」に作る。○紀數――罪を数え上げること。

（9）〈願搖起而横奔兮〉

言己見君妄怒、無辜而受罰、則欲**搖**動而奔走。

〔訓讀文〕

言ふこころは、己 君の妄怒を見、無辜にして罰を受くれば、則ち**搖**動して奔走せんと欲す。

〔語釋〕

○無辜――罪のないこと。またそのような人。

〈10〉〈覽民尤以自鎭〉

尤、過也。鎭、止也。言己覽觀衆民多無過惡而被刑罰、非獨己身。自鎭止而慰己也。

〔補曰〕鎭、音珍。

〔訓讀文〕

尤は、過(とが)なり。鎭は、止むるなり。言ふこころは、己 衆民 多く過惡無くして刑罰を被り、獨り己の身のみに非ざるを覽觀す。自ら鎭止して己を慰さむるなり。

〔補に曰く〕鎭、音は珍、と。

〔語釋〕

○覽觀――觀察すること、眺め見ること。○鎭止――抑える、止めること。

〈11〉〈結微情以陳詞兮〉

結續妙思、作辭賦也。

〔訓讀文〕

妙思を結續して、辭賦を作るなり。

〔語釋〕

○結續妙思――多くの民衆のこまごまとした思いを寄せ集めるさま。先の「衆民多無過惡而被刑罰」を踏まえての語か。

〈12〉〈矯以遺夫美人〉

舉與懷王、使覽照也。

〔補曰〕遺、去聲。

〔訓讀文〕

舉げて懷王に與へ、覽照せしむるなり。

〔補に曰く〕遺は、去聲なり、と。

〔語釋〕

○覽照――かんがみ、照らし合わせること。ここでは懷王に全部見せた上で考えていただきたいということ。

〔本文〕

(13) 昔君與我誠言兮、　　昔君 我と言を誠(な)し、

(14) 曰黃昏以爲期。　　曰く、黃昏以て期と爲さん、と。

(15) 羌中道而回畔兮、　　羌(あゝ) 中道にして回畔(くわいはん)し、

(16) 反既有此他志。　反つて既に此の他志有り。
(17) 憍吾以其美好兮、　吾に憍(おご)るに其の美好を以てし、
(18) 覽余以其脩姱、　余に覽(しめ)すに其の脩姱(しうくわ)を以てし、
(19) 與余言而不信兮、　余と言ひて信ならざるは、
(20) 蓋爲余而造怒。　蓋し余が爲にして怒りを造(な)せばなり。

〔通釋〕

以前わが君はわたくしと固く口約束して、夕暮れに会おうと約束されたのに、ああ、途中で約束に背かれ、かえって他にお心を移されてしまわれた。わが君がわたくしにその美しい容貌を誇り、その修まって立派な行いを示されながら、私と約束してお守りにならなかったのは、わたくしのことを誤解して、怒っておられるからでしょう。

〔洪興祖補注〕

〈13〉〈昔君與我誠言兮〉

始君與己謀政務也。誠、一作「成」。

〔訓讀文〕

始め君 己と政務を謀るなり。誠は、一に「成」に作る。

〔語釋〕

○誠言——成言に同じ。『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻一「離騷經章句第一」に「初め既に余と言を成す（初既與余成言兮）」

とある。『補注』は、「成言は、誠信の言を謂ひ、一たび成して易へざるなり。九章は「誠言」に作る（成言、謂誠信之言、一成而不易也。九章作「誠言」）」とし、ここでは固い口約束の意か。藤野岩友博士『漢詩選 3 楚辭』は、「わたくしと夫婦になろうと口約束して…」と訳す。○謀政務――相談して政治を行う意。

〈14〉〈曰黄昏以爲期〉

且待日没閒静時也。

〔補曰〕淮南曰、「薄于虞淵、是謂黄昏。」黄昏、**喩**晩節也。戰國策云、「行百里者、半於九十。」此言末路之難。

〈訓讀文〉

且に日没の閒静の時を待つべし。

〔補に曰く〕『淮南』に曰く、「虞淵（ぐゑん）に薄（せま）る、是を黄昏と謂ふ」と。黄昏とは、晩節に**喩**ふるなり。『戰國策』に云ふ、「百里を行く者は、九十を半ばとす」と。此れ末路の難きを言ふなり、と。

〈語釋〉

○黄昏以爲期――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻一「離騷經章句第一」にも同文が確認できる。○淮南曰――『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）巻三「天文訓」は「薄」を「至」に作る。「虞淵」は、太陽が没するとされる場所。○戰國策云――『戰國策箋證』（上海古籍出版社）巻七「秦五」に同文あり。

〈15〉〈羌中道而回畔兮〉

信用讒人、更狐疑也。

讒人を信用して、更に狐疑するなり。

〈語釋〉

○羌中道――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻一「離騷經章句第一」に、「羌中道而改路」とある。ここでの「中道」は、途中の意か。○狐疑――ひどく疑うこと。

（16）〈反既有此他志〉

〔訓讀文〕

謂己不忠、遂外疏也。

〔補曰〕志、音之、叶韻。

〔訓讀文〕

己を不忠と謂ひ、遂に外に疏んぜらるるなり。

〔補に曰く〕志、音は之、叶韻なり、と。

〈語釋〉

なし。

（17）〈憍吾以其美好兮〉

握持寶玩、以侮余也。一無「其」字。

〔補曰〕此言懷王自矜伐也。憍、矜也。莊子曰、「虛憍而恃氣。」讀若驕。

〔訓讀文〕

寶玩を握持して、以て余を侮るなり。一に「其」の字無し。

〔補に曰く〕此れ懷王自ら矜伐するを言ふなり。憍は、矜なり。『莊子』に曰く、「虛憍して氣を恃む」と。讀みて驕の若し、と。

〔語釋〕

○握持寶玩――珍宝を握り持つこと。ここでは、気に入られようと驕り高ぶること。○莊子曰――『莊子集解』（新編諸子集成）巻五「達生第十九」に同文あり。「虛憍而恃氣。」とは、何の根拠もなく驕り、威勢だけをたのみにするさま。

（18）〈覽余以其脩姱〉

陳列好色、以示我也。覽、一作「鑒」。脩、一作「修」。

〔補曰〕姱、好也、亦有**户**音。

〔訓讀文〕

好色を陳列して、以て我に示すなり。覽は、一に「鑒」に作る。脩は、一に「修」に作る。

〔補に曰く〕姱は、好なり。亦た**户**の音有り、と。

〔語釋〕

○陳列好色――見栄えの良いものを並べて誇ること。

（19）〈與余言而不信兮〉

外若親己、內懷詐也。一作「途言」。

〔訓讀文〕

外 己に親しむが若くなるも、內 詐を懷くなり。一に「途言」に作る。

〔語釋〕

○內懷詐――外面では親しくし、内面では不実であること。『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻三「天問章句第三」に「何ぞ變化して以て詐を作し、後嗣にして逢長なる（何變化以作詐、後嗣而逢長）」とあり、王逸注に、「言ふこころは、象舜を殺さんと欲し、其の態を變化し、內は姦詐を作す…（言象欲殺舜、變化其態、內作姦詐…）」とある。

〈20〉〈蓋爲余而造怒〉

責其非職、語橫暴也。蓋、一作「盍」。

〔補曰〕爲、去聲。

〔訓讀文〕

其の非職を責め、語 橫暴なり。蓋は、一に「盍」に作る。

〔補に曰く〕爲は、去聲なり、と。

〔語釋〕

○造怒――ここでは、どうにか過ちを探り出して、その過ちについて怒ること。○責其非職――職に適任でなかったことを咎める意。

〔本文〕

(21) 願承閒而自察兮、　閒を承けて自ら察かにせんと願ふも、
(22) 心震悼而不敢。　心 震悼して敢へてせず。
(23) 悲夷猶而冀進兮、　悲しみ夷猶して進まんことを冀へども、
(24) 心怛傷之憺憺。　心 怛傷して憺憺たり。
(25) 茲歷情以陳辭兮、　茲に情を歷ねて辭を陳ぶるも、
(26) 蓀詳聾而不聞。　蓀は詳り聾して聞かず。
(27) 固切人之不媚兮、　固より切人の媚びざる、
(28) 衆果以我爲患。　衆 果たして我を以て患と爲す。
(29) 初吾所陳之耿著兮、　初め吾が陳ぶる所の耿著なる、
(30) 豈至今其庸亡。　豈に今に至つて其れ庸ぞ亡れんや。
(31) 何毒藥之謇謇兮、　何ぞ毒藥の謇謇たるや、
(32) 願蓀美之可完。　蓀の美の完かるべきを願へばなり。
(33) 望三五以爲像兮、　三五を望んで以て像と爲し、
(34) 指彭咸以爲儀。　彭咸を指して以て儀と爲さん。
(35) 夫何極而不至兮、　夫れ何れの極か至らざらん、
(36) 故遠聞而難虧。　故に遠く聞こえて虧け難し。
(37) 善不由外來兮、　善は外より來たらず、
(38) 名不可以虛作。　名は以て虛しく作すべからず。
(39) 孰無施而有報兮、　孰か施すこと無くして報有らん、
(40) 孰不實而有穫。　孰か實らずして穫ること有らん。

〔通釋〕

わが君のお暇な折を見てみずから弁明しようと思うが、心は震えおののき、思い切って申し上げることができない。悲しみためらいながらもお目通りしたくは思うけれども、心は悲しみ痛んで動揺する。ここに真情を列挙してことばを述べるが、わが君は聞こえないふりをして聞こうとなさらない。もとよりゆきとどいて正しい人物は、君主に媚びたりはしないものだから、わたくしのことをば衆人は果たしてやっかいなやつと考えた。

昔、わたくしが述べたことは明白でございます。それなのにどうして今になってお忘れになったりすることがございましょうか。なんで毒薬のような厳しい言葉をずけずけと申し上げましょう。ただ皆、香しきわが君のりっぱなお徳が完かれと願えばこそでございます。

三王五伯を望み見てわが君の模範とし、彭咸を指さしておのれの手本としよう。このようにすれば、ほんとにどのような目標でも到達できないことはない。それでその名は遠くいつまでも聞こえて、滅びることはないであろう。善は外から来るものではなく、名は実なくして立てることはできない。だれが施さないで報いを得られよう。だれが実らないのに刈り取れよう。

〔洪興祖補注〕

〈21〉〈願承閒而自察兮〉

思待清宴、自解說也。

〔補曰〕閒音閑。莊子曰、「今日宴閒。」察、明也。

〔訓讀文〕

清宴を待ちて、自ら解說せんことを思ふなり。

〔補に曰く〕閒、音は閑。『莊子』に曰く、「今日宴閒」と。察は、明らかにするなり、と。

〔語釋〕

○待清宴――君主の公務の合間にお目にかかることを期待すること。○自解說――君主に対する忠心を自分自身で申し上げること。○莊子曰――『莊子集解』（新編諸子集成）巻六「知北游第二十二」に「今日晏閒。」とある。

〈22〉〈心震悼而不敢〉

志恐動悸、心中怛也。

〔訓讀文〕

志 恐れて動悸し、心中 怛(いた)むなり。

〔語釋〕

○心中怛――心が痛むさま。『毛詩正義』（十三經注疏）巻七 檜風「匪風」に「中心 怛む（中心怛兮）」とある。

〈23〉〈悲夷猶而冀進兮〉

意懷猶豫、幸擢拔也。

〔訓讀文〕

意懷 猶豫して、擢拔せられんことを幸(ねが)ふなり。

〔語釋〕

○意懷猶豫――思いためらう意。○幸擢拔――君主から引き抜かれ任用されることを願う。

（24）〈心怛傷之憺憺〉

肝膽剖破、血凝滯也。

〔補曰〕怛、當割切、悲慘也。憺、談敢切、安靜也。

〔訓讀文〕

肝膽剖破（かんたんぼうは）して、血凝滯するなり。

〔補に曰く〕怛は、當割の切、悲慘なり。憺は、談敢の切、安靜なり、と。

〔語釋〕

○肝膽剖破――こころが激烈に痛むこと。

（25）〈玆歷情以陳辭兮〉

發此憤思、列謀謨也。一作「歷玆情」。

〔訓讀文〕

此の憤思を發して、謀謨を列ぬるなり。一に「歷玆情」に作る。

〔語釋〕

○列謀謨――はかりごとを挙げ述べる。

(26)〈蓀詳聾而不聞〉

君耳不聽、若風過也。蓀、一作「荃」。詳、一作「佯」。

〔補曰〕詳、詐也、與「佯」同。

〔訓讀文〕

君の耳 聽かざること、風の過ぐるがごときなり。蓀、一に「荃」に作る。詳、一に「佯」に作る。

〔補に曰く〕詳は、詐るなり、「佯」と同じ、と。

〔語釋〕

○君耳不聽、若風過也――風が吹き過ぎていくように、君主が聞く耳を持たないこと。

(27)〈固切人之不媚兮〉

琢瑳羣佞、見憎惡也。

〔訓讀文〕

羣佞を琢瑳して、憎惡せらるるなり。

〔語釋〕

○琢瑳羣佞――佞人たちを正す。

（28）〈衆果以我爲患〉

諂諛比己于劒戟也。

〔補曰〕患音還。

〔訓讀文〕

諂諛（てんゆ）己を劒戟に比するなり。

〔補に曰く〕患、音は還、と。

〔語釋〕

○諂諛比己于劒戟――君主に媚び諂う者は、私を、人を殺傷するための兵器に喩えるということ。

（29）〈初吾所陳之耿著兮〉

論說政治、道明白也。

〔補曰〕耿、古迥切。

〔訓讀文〕

政治を論說し、道 明白なり。

〔補に曰く〕耿は、古迥の切、と。

〔語釋〕

○論說政治――まつりごとについて意見を述べること。○道明白――道理の明らかなさま。

〈30〉〈豈至今其庸亡〉

文辭尚在、可求索也。一云「豈不至今其庸止」。

〔訓讀文〕

文辭 尚ほ在り、求索すべきなり。一に云ふ、「豈不至今其庸止」と。

〔語釋〕

○文辭尚在――私のことばは忘れられずに君主の中にまだ在ること。○可求索也――探し求めるべきだということ。

〈31〉〈何毒藥之謇謇兮〉

忠信不美、如毒藥也。一云「何獨樂斯之謇謇兮」。

〔補曰〕書曰、「若藥不瞑眩、厥疾不瘳。」傳曰、「美疢不如惡石。」

〔訓讀文〕

忠信は美ならず、毒藥のごときなり。一に云ふ、「何獨樂斯之謇謇兮」と。

〔補に曰く〕『書』に曰ふ、「若し藥 瞑眩せざれば、厥の疾 瘳えず」と。『傳』に曰ふ、「美疢は惡石に如かず」と。

〔語釋〕

○書曰――『尚書正義』（十三經注疏）巻十「說命上第十二」に同文あり。偽孔伝に「如し藥を服せば必ず瞑眩極まりて、其の病乃ち除かる。其れ切言を出だして以て自警せんと欲す。（如服藥必瞑眩極其病乃除。欲其出切言以自警。）」とあり、正義に「言ふこころは、藥毒は乃ち病を除き得るとは、言 切なれば乃ち惑を去り得るなり。（言藥毒乃得除病、言切乃得去惑也。）」とある。○傳曰――『春秋左氏傳正義』（十三經注疏）巻三十五「襄公二十三年」に同文あり。杜預注に「己が疾を愈すなり。（愈己疾也。）」とある。また当該部分より先掲の伝に「季孫の我を愛するは、疾疢なり。孟孫の我を悪むは、藥石なり。（季孫之愛我報疾疢也。孟孫之惡我藥石也。）」とあり、杜預注に「常志 相順ひ従ふは、身の害なり。常志 相違戻するは、猶ほ藥石の疾を療するがごとし。（常志相順從身之害。常志相違戻猶藥石之療疾。）」とある。

〈32〉〈願蓀美之可完〉

想君德化、可興復也。蓀、一作「荃」。完、一作「光」。

〔訓讀文〕

君の德化、興復すべきを想ふなり。蓀は、一に「荃」に作る。完は、一に「光」に作る。

〔語釋〕

○興復――再び隆興する。

〈33〉〈望三五以爲像兮〉

三王五伯、可修法也。

〔訓讀文〕

三王五伯、修法すべきなり。

〔語釋〕

○三王五伯――三王は聖天子。一説に夏の禹王、殷の湯王、周の文王・武王のこと。五伯は春秋五覇。一説に斉の桓公、晉の文公、楚の莊王、秦の穆王、宋の襄公のこと。○修法――模範とすること。

（34）〈指彭咸以爲儀〉

先賢清白、我式之也。

〔訓讀文〕

先賢は清白にして、我 之れに式(のつと)るなり。

〔語釋〕

○先賢――ここでは彭咸のこと。彭咸については『楚辭補注』譯注稿（三）・（十三）に既出。

（35）〈夫何極而不至兮〉

盡心修善、獲官爵也。

〔補曰〕此言以聖賢爲法、盡心行之、何遠而不至也。

〔訓讀文〕
心を盡(つ)くし善を修めて、官爵を獲るなり。
〔補に曰く〕此れ言ふこころは、聖賢を以て法と爲し、心を盡くして之れを行ひ、何ぞ遠くして至らざらん、と。

〔語釋〕
○以聖賢爲法――先の聖人たちを模範とすること。○何遠而不至也――どこまでも名声は聞こえて、至らぬ所などないこと。

(36)〈故遠聞而難虧〉
功名布流、長不滅也。

〔訓讀文〕
功名 布流して、長(とこしな)へに滅びざるなり。

〔語釋〕
○功名布流――名声が広く伝わること。

(37)〈善不由外來兮〉
才德仁義、從己出也。

〔訓讀文〕
才德仁義、己從(よ)り出づるなり。

〈38〉〈名不可以虚作〉

愚欲強智、不能及也。

〔補曰〕此言有實而後名從之。

〔訓讀文〕

愚 強ひて智ならんと欲するも、及ぶ能はざるなり。

〔補に曰く〕此れ實 有りて而る後に名 之に從ふを言ふ、と。

〔語釋〕

○有實而後名從之――実態があってはじめて、名がその実態に従う。

〈39〉〈孰無施而有報兮〉

誰不自施德而蒙福。

〔補曰〕施、矢豉切。

〔訓讀文〕

誰か自ら德を施さずして福を蒙らん。

〔補に曰く〕施は、矢豉の切、と。

〈40〉〈孰不實而有穫〉

空穗滿田、無所得也。以言上不施惠、則下不竭其力。君不履信誠、則臣下僞惑也。穫、一作「獲」。

〔訓讀文〕

空穂 田に滿ちて、得る所無きなり。以て言へらく、上 施惠せざれば、則ち下 其の力を竭(つ)くさず。君 信誠を履まざれば、則ち臣下 僞惑するなり。穫は、一に「獲」に作る。

〔語釋〕

○上不施惠、則下不竭其力——上が下に対して恵みを施してやらなければ、下は上に対して自身の力を尽くすことはしないということ。○君不履信誠、則臣下僞惑也——君主が臣下に対して信誠を履行しなければ、臣下は君主に対して偽り惑うということ。

〔本文〕

(41) 少歌曰、
(42) 與美人抽怨兮、
(43) 并日夜而無正。
(44) 憍吾以其美好兮、
(45) 敖朕辭而不聽。

〔通釋〕

少歌に曰く、
美人の與(ため)に怨みを抽(ぬ)くも、
日夜を并はせて正すこと無し。
吾に憍(おご)るに其の美好を以てし、
朕(わ)が辭を敖(あなど)りて聽かず。

少歌にいう、「美しいわが君のために心の思いをひき出して、昼も夜も述べ続けるが、わが君はわたくしのことばの是非を正そうとはなさらない。わたくしにその美貌を誇り、わたくしのことばをあなどって聴き入れては下さらない。

〈洪興祖補注〉

〈41〉〈少歌曰〉

小唫謳謠以樂志也。少、一作「小」。

〔補曰〕少、矢照切。荀子曰、「其小歌也。」注云、「此下一章、卽其反辭、總論前意、反復說之也。」此章有少歌、有倡、有亂。少歌之不足、則又發其意而爲倡。獨倡而無與和也、則總理一賦之終、以爲亂辭云爾。

〈訓讀文〉

小唫（せうぎん）謳謠（あうえう）して以て志を樂しむなり。少は、一に「小」に作る。

〔補に曰く〕少は、矢照の切。『荀子』に曰く、「其れ小歌なり」と。注に云ふ、「此の下一章は、卽ち其の反辭にして、前意を總論して、反復して之を說くなり」と。此の章に少歌有り、倡有り、亂有り。少歌の足らざれば、則ち又た其の意を發して倡を爲す。獨倡して與に和すること無ければ、則ち一賦の終を總理して、以て亂辭と爲すと爾（しか）云ふ、と。

〈語釋〉

○小唫謳謠――反辞の一種。ここでは、自分の思慮を纏めて振り返って歌うこと。○荀子曰――『荀子集解』（新編諸子集成）巻十八「賦篇」に「其の小歌に曰く、彼の遠方を念ふに、何ぞ其れ塞なる。（其小歌曰、念彼遠方、何其塞矣。）」とあり、その楊倞注に「此の下一章は、卽ち其の反辭にして、故に之を小歌と謂ひて、前意を總論するなり。（此下一章、卽其反辭、故謂之小歌、總論前意也。）」とある。また、盧文弨は「『曰』、各本は多く也に作る。一本 曰に作る有れば、今之に從ふ。（『曰』、各本多作『也』。有一本作『曰』、今從之。）」という。○總理一賦之終――一首の賦の終わりを締めくくって乱辞とすること。

〈42〉〈與美人抽怨兮〉

爲君陳道、拔恨意也。

〔訓讀文〕

君の爲に道を陳べて、恨意を拔くなり。

〔語釋〕

○拔恨意也――後悔の無いように、心の奥底の想いを述べること。

〈43〉〈并日夜而無正〉

君性不端、晝夜謬也。并、一作「弃」。一云「并憾日夜無正」。

〔補曰〕并、並也。馮衍賦云、「并日夜而憂思。」

〔訓讀文〕

君の性は端ならず、晝夜 謬れるなり。并は、一に「弃」に作る。一に云ふ、「并憾日夜無正」と。

〔補に曰く〕并は、並ぶるなり。馮衍の賦に云ふ、「日夜を并はせて憂思す」と。

〔語釋〕

○君性不端――君主の性質が端直でないさま。○馮衍賦云――『後漢書』（點校本二十四史）巻二十八下「馮衍傳下第十八下」に同文あり。ただし、『後漢書』は、「并日夜而幽思兮」に作る。

〈44〉〈憍吾以其美好兮〉

示我爵位及財賄也。憍、一作「驕」。

〔訓讀文〕

我に爵位及び財賄を示すなり。憍は、一に「驕」に作る。

〔語釋〕

○示我爵位及財賄也――地位や財産のような、外面を飾り、他人に見せつけることのできるものを自慢すること。〔本文〕の「美好」や〔通釋〕の「美貌」は、「爵位及財賄」に因って作り上げられる。

〈45〉〈敖朕辭而不聽〉

慢我之言而不采聽也。敖、一作「謷」。

〔補曰〕敖、倨也。與傲同。

〔訓讀文〕

我の言を慢(あなど)りて采聽せざるなり。敖は、一に「謷」に作る。

〔補に曰く〕敖は、倨(あなど)るなり。「傲」と同じ、と。

〔語釋〕

○敖、倨也――『春秋左傳注疏』（十三經注疏）巻三十九「襄公二十九年」に「直にして倨らず（直而不倨）」とあり、杜預注に「倨は、傲なり（倨、傲）」とある。

〈本文〉

(46) 倡曰、　　倡(しやう)に曰く、
(47) 有鳥自南兮、　　鳥有り南自りし、
(48) 來集漢北。　　來たりて漢北に集まる。
(49) 好姱佳麗兮、　　好姱(かうくわ) 佳麗、
(50) **牉**獨處此異域。　　**牉**(わか)れて獨り此の異域に處(お)る。
(51) 既惸獨而不羣兮、　　既に惸獨(けいどく)にして羣せず、
(52) 又無良媒在其側。　　又た良媒(りやうばい)の其の側に在る無し。
(53) 道卓遠而日忘兮、　　道 卓遠にして日に忘れられ、
(54) 願自申而不得。　　自ら申べんと願へども得ず。

〈通釋〉

倡にいう、南の方から一羽の鳥が、飛んで来て漢水の北に止まった。姿も好く美しいのに、群れを分かれてひとりこの異郷にいる。すでに孤独で群れから離れ、その上良い仲人もわが君のお側にはいない。都への道ははるかに遠く、わが君からは日々わたくしのことを忘れられてゆき、自分の口から直接申し上げようと思っても申し上げることができない。〔洪興祖補注〕

〈46〉〈倡曰〉

起倡發聲、造新曲也。
〔補曰〕倡、與唱同。

〔訓讀文〕

起倡　發聲して、新曲を造るなり。

〔補に曰く〕倡は、「唱」と同じ。

〔語釋〕

○起倡發聲――屈原が自分の想いに沿って、新たに歌を作ろうとするさま。

（47）〈有鳥自南兮〉

屈原自**喩**、生楚國也。

〔補曰〕孔子曰、「鳥則擇木、木豈能擇鳥。」子思曰、「君子猶鳥也。疑之則擧矣。」「色斯擧矣、翔而後集。」故古人以自**喩**。

〔訓讀文〕

屈原自ら楚國に生まるるに**喩**ふるなり。

〔補に曰く〕孔子曰く、「鳥は則ち木を擇ぶ、木　豈に能く鳥を擇ばんや」と。子思曰く、「君子は猶ほ鳥のごときなり。之を疑へば則ち擧がる。」「色みて斯に擧がり、翔りて而る後に集まる」と。故に古人以て自らに**喩**ふ、と。

〔語釋〕

○孔子曰――『春秋左傳正義』（十三經注疏）巻五十八「哀公十一年」に同文あり。○君子猶鳥也――『呂氏春秋集釋』（新編諸子集成）巻十八「審應覽」に、「孔思　行らんことを請ふ、魯君曰く、「天下の主も亦た猶ほ寡人のごときなり、將た焉くに之かん。」孔思對へて曰く、「蓋し聞く君子は猶ほ鳥のごときなり、駭けば則ち擧がる」と。（孔思請行、魯君曰、「天下主亦猶寡人也、將焉之。」孔思對曰、「蓋聞君子猶鳥也、駭則擧。」）」とある。孔思は、子思のこと。○色斯擧矣――『論語

注疏』（十三經注疏）巻十「鄭黨第十」に同文あり。

（48）〈來集漢北〉

雖易水土、志不革也。

〔補曰〕禹貢、「嶓冢導漾、東流爲漢。」周禮、「荆州、其川江・漢。」漢、楚水也。水經及山海經注云、「漢水出隴西氐道縣嶓塚山。初名漾水、東流至武都沮縣、始爲漢水。東南至葭萌、與羌水合。至江夏安陸縣、名沔水。故有漢沔之名。又東至竟陵、合滄浪之水、又東過三澨、水觸大別山、南入於江也。」

〈訓讀文〉

水土を易ふと雖も、志は革めざるなり。

〔補に曰く〕禹貢に、「嶓冢は漾を導き、東に流れて漢と爲る。」周禮に、「荆州、其の川は江・漢なり」と。漢は、楚水なり。水經及び山海經注に云ふ、「漢水は隴西 氐道縣の嶓塚山より出づ。初め漾水と名づけ、東に流れて武都 沮縣に至り、始めて漢水と爲る。東南して葭萌に至り、羌水と合す。江夏 安陸縣に至りて、沔水と名づく。故に漢沔の名有り。又た東して竟陵に至りて、滄浪の水と合し、又た東して三澨を過ぎ、水は大別山に觸れ、南して江に入るなり」と。

〈語釋〉

○禹貢――『尚書正義』（十三經注疏）巻六「禹貢」に同文あり。○周禮――『周禮注疏』（十三經注疏）巻三十三「夏官司馬」に「正南を荆州と曰ひ、其の山鎮を衡山と曰ひ、其の澤藪を雲瞢と曰ひ、其の川は江・漢、其の浸は潁・湛、其の利は丹・銀・齒・革、其の民一男二女、其の畜は鳥獸に宜しく、其の穀は稻に宜し。（正南曰荆州、其山鎮曰衡山、其澤藪曰雲瞢、其川江・漢、其浸潁・湛、其利丹・銀・齒・革、其民一男二女、其畜宜鳥獸、其穀宜稻。）」とある。○水經――『合校水經注』（中華書局）巻二十「漾水」に「漾水は隴西 氐道縣の嶓冢山より出で、東して武都 沮縣に至りて漢水と爲る。又た東

南して廣魏 白水縣の西に至る。又た東南して葭萌縣に至り、東北して羌水と合す。（漾水出隴西氐道縣嶓冢山、東至武都沮縣爲漢水。又東南至廣魏白水縣西。又東南至葭萌縣、東北與羌水合。）」とある。○山海經注云――『山海經廣注』（新編諸子集成續編）巻二「西山經」に「又た西 三百二十里を嶓冢の山と曰ふ。漢水は焉より出でて、東流して沔に注ぐ。（又西三百二十里曰嶓冢之山。漢水出焉、而東流注于沔。）」とあり、郭璞注に「江夏 安陸縣に至れば、江は卽ち沔水なり。」とある。

〈49〉〈好姱佳麗兮〉

容貌說美、有俊德也。

〔訓讀文〕

容貌 說美にして、俊德有るなり。

〔語釋〕

なし。

〈50〉〈牉獨處此異域〉

背離鄉黨、居他邑也。**牉**、一作「叛」、一作「柈」。

〔補曰〕**牉**音泮、舊音伴。

〔訓讀文〕

鄉黨に背離して、他邑に居るなり。**牉**は、一に「叛」に作り、一に「柈」に作る。

〔補に曰く〕**牉**音は泮、舊音は伴、と。

〈語釋〉

○背離**鄉黨**――楚の人々に背を向け離れていくさま。

〈51〉〈既惸獨而不羣兮〉

行與衆異、身孤特也。

〔補曰〕惸、渠榮切、無弟兄也。

〈訓讀文〉

行ひ衆と異なり、身 孤特なり。

〔補に曰く〕惸は、渠榮の切、弟兄無きなり。

〈語釋〉

○孤特――ここでは、身寄り頼りが全くない意。『禮記注疏』（十三經注疏）巻十三「王制」に「少（わか）くして父無き者 之を孤と謂ひ、老いて子無き者 之を獨と謂ひ、老いて妻無き者 之を矜（かん）と謂ひ、老いて夫無き者 之を寡と謂ふ。（少而無父者謂之孤、老而無子者謂之獨、老而無妻者謂之矜、老而無夫者謂之寡。）」とある。

〈52〉〈又無良媒在其側〉

左右嫉妬、莫衒鬻也。

〔訓讀文〕

左右は嫉妬し、衒鬻（げんいく）すること莫きなり。

〔語釋〕

○莫衒鬻也――「衒鬻」は、自分の才能を叩き売ること。『楚辭章句』（楚辭要籍叢刊）巻十七「九思章句第十七 疾世」に「衒鬻せんとを欲すれども取らるること莫し。（欲衒鬻兮莫取。）」とあり、王逸注には、「行賣を衒と曰ふ。鬻は、賣るなり。言ふこころは、己忠信を竭して以て君に事ふるも用ゐられざるなり。猶ほ此の昭華・寶璋を抱へて之を衒賣するがごとし。（行賣曰衒。鬻、賣也。言己竭忠信以事君而不見用。猶抱此昭華・寶璋衒賣之。）」とある。

〔53〕〈道卓遠而日忘兮〉

卓、一作「逴」。

〔訓讀文〕

卓、一に「逴」に作る。

〔語釋〕

なし。

〔54〕〈願自申而不得〉

王逸注・洪興祖注共になし。

〔本文〕

(55) 望丘山而流涕兮、
(56) 臨流水而太息。
(57) 望孟夏之短夜兮、
(58) 何晦明之若歲。
(59) 惟郢路之遼遠兮、
(60) **羌**一夕而九逝。
(61) 曾不知路之曲直兮、
(62) 南指月與列星、
(63) 願徑逝而未得兮、
(64) 魂識路之營營。
(65) 何靈**魂**之信直兮、
(66) 人之心不與吾心同、
(67) 理弱而媒不通兮、
(68) 尚不知余之從容。

丘山を望んで流涕し、
流水に臨んで太息す。
孟夏の短夜を望むに、
何ぞ晦明の歳の若くなる。
惟れ郢路の遼遠なる、
羌一夕にして九逝す。
曾ち路の曲直を知らず、
南のかた月と列星とを指し、
徑ちに逝かんと願ひて得ざるに、
魂の路を識るの營營たり。
何ぞ靈**魂**の信直なる、
人の心は吾が心と同じからず、
理弱くして媒通ぜず、
尚ほ余の從容を知らざるに。

〔通釋〕

丘山を望んでは涙を流し、流れに臨んでは溜息をつく。初夏の短夜であってほしいと思っているのに、この秋の夜は、なんと夜明けまで一年立つかと思われる。郢都への道ははるかに遠いのに、魂は一晩に九度も飛んで行く。都への道がどのように続いているかも知らず、南の方、月と星とを指さして、すぐにも行こうと思いながら、果たせずにいるのに、魂はよく道を知っていて、このように往ったり来たりする。なんと霊魂のまっ正直なことよ、わが君の心は自分の心と同じでなく、

その上、結婚の申し入れには力がなく、仲人のことばも通ぜず、今なおわが君はわたくしのふるまいの真実を分かっては下さらないのに。

〈洪興祖補注〉

（55）〈望丘山而流涕兮〉

瞻仰高景、愁悲泣也。丘山、一作「南山」。

〔訓讀文〕

高景を瞻仰（せんぎやう）し、愁悲して泣くなり。丘山は、一に「南山」に作る。

〔語釋〕

○瞻仰――見上げる。あおぎみる。

（56）〈臨流水而太息〉

顧念舊故、思親戚也。流水、一作「深水」。

〔訓讀文〕

舊故を顧念し、親戚を思ふなり。流水は、一に「深水」に作る。

〔語釋〕

○舊故――ふるいなじみ。むかしの友。旧友。又、故郷のこと。○顧念――何度も思い返すさま。常に思い出すさま。

(57)〈望孟夏之短夜兮〉

四月之末、陰盡極也。

〔補曰〕上云「曼遭夜之方長」、此云「望孟夏之短夜」者、秋夜方長、而夏夜最短、憂不能寐。冀夜短而易曉也。

〔訓讀文〕

四月の末、陰 盡極するなり。

〔補に曰く〕上に云ふ、「曼として夜の方に長きに遭ふ」と。此に「孟夏の短夜を望む」と云ふは、秋夜 方に長くして、夏夜 最も短し。憂へて寐ぬる能はず。夜短くして曉け易きを冀ふなり、と。

〔語釋〕

○陰盡極――四月の末には夜の長さが尽き極まって短くなることを指す。○上云――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻四「九章章句第四 抽思」の冒頭に「曼遭夜之方長」とある。

(58)〈何晦明之若歲〉

憂不能寐、常倚立也。

〔訓讀文〕

憂へて寐ぬる能はずして、常に倚立（いりつ）するなり。

〔語釋〕
○倚立――よりかかったままで横になれないさま。

〈59〉〈惟郢路之遼遠兮〉
隔以江湖、幽僻側也。

〔訓讀文〕
隔つるに江湖、幽僻（いうへき）の側を以てするなり。

〔語釋〕
○隔以江湖、幽僻側也――幾つもの江や湖を超えなければならないほど、遠く土地を隔てているさま。

〈60〉〈寃一夕而九逝〉
精**寃**夜歸、幾滿十也。

〔訓讀文〕
精**寃**の夜歸ること、幾（ほとん）ど十に滿つるなり。

〔語釋〕
なし。

〈61〉〈曾不知路之曲直兮〉

忽往忽來、行亟疾也。一本云「曾不知路之曲直兮、魂識路之營營。何靈魂之信直兮、南指月與列星。願徑逝而未得兮、人之心不與吾心同」。

〔訓讀文〕

忽として往き忽として來り、行くこと亟疾（きょくしつ）たるなり。一本に云ふ、「曾不知路之曲直兮、魂識路之營營。何靈魂之信直兮、南指月與列星。願徑逝而未得兮、人之心不與吾心同」と。

〔語釋〕

○忽――たちまち、すみやか、突然。○亟疾――すみやか、性急、火急。

〈62〉〈南指月與列星〉

參差轉運、相遞代也。

〔訓讀文〕

參差（しんし）として轉運し、相 遞代（ていだい）するなり。

〔語釋〕

○參差轉運――入れ替わり立ち替わり運行するさま。○相遞代――かわるがわる交代するさま。

〈63〉〈願徑逝而未得兮〉

意欲直還、君不納也。未、一作「不」。

〔訓讀文〕

意に直還せんと欲するも、君納(い)れざるなり。未は、一に「不」に作る。

〔語釋〕

○不納――屈原が楚に直ちに還ろうとすることを容認しないこと。

〈64〉〈魂識路之營營〉

精靈主行、徃來數也。或曰、識路、知道路也。營、一作煚。

〔補曰〕詩注云、「營營、徃來貌。」煚煚、憂也。音瓊。

〔訓讀文〕

精靈 行を主り、徃來すること數々なり。或いは曰く、路を識るは、道路を知るなり、と。營は、一に煚に作る。

〔補に曰く〕『詩』注に云ふ、「營營は、徃來する貌なり」と。煚煚は、憂ふるなり。音は瓊(けい)なり、と。

〔語釋〕

○精靈主行――精霊が道のりを先導すること。○道路――到達するための道筋。○詩注云――『毛詩正義』（十三經注疏）巻十四 小雅 甫田之什「靑蠅」の毛傳に同文あり。

〈65〉〈何靈冤之信直兮〉

質性忠正、不枉曲也。

〔訓讀文〕

質性 忠正にして、枉曲せざるなり。

〔語釋〕

○質性――うまれつき。又、かざりのない心。性質。資性。○忠正――忠実で正しい。又、真心があって正しい。又、その心。○枉曲――ここでは志を曲げること。

〈66〉〈人之心不與吾心同〉

我志清白、衆泥濁也。

〔訓讀文〕

我が志清白にして、衆 泥濁なり。

〔語釋〕

なし。

〈67〉〈理弱而媒不通兮〉

知友劣弱、又鄙朴也。

〔訓讀文〕

友劣弱にして、又 鄙朴なるを知るなり。

〔語釋〕

○理弱而媒不通兮――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻一「離騷経章句第一」に、「理 弱くして媒 拙なり（理弱而媒拙兮）」とある。○鄙朴――ここでは、礼についての理解を欠いており、仲人としての役目を果たせない様。

（68）〈尚不知余之從容〉

未照我志之所欲也。

〔補曰〕言尚不知己志、況能召我也。

〔訓讀文〕

未だ我が志の欲する所を照らさざるなり。

〔補に曰く〕言ふこころは、尚ほ己 の志を知らず、況んや能く我を召すをや、と。

〔語釋〕

なし。

〔本文〕

亂曰、

（69）長瀨湍流、泝江潭兮、

亂に曰く、

長瀨湍流（ちょうらいたんりゅう）、江潭（こうたん）を泝（さかのぼ）り、

(70) 狂顧南行、聊以娯心兮。
(71) 軫石崴嵬、蹇吾願兮、
(72) 超回志度、行隠進兮。
(73) 低佪夷猶、宿北姑兮。
(74) 煩冤瞀容、實沛徂兮。
(75) 愁歎苦神、靈遙思兮。
(76) 路遠處幽、又無行媒兮。
(77) 道思作頌、聊以自救兮。
(78) 憂心不遂、斯言誰告兮。
(79) 抽思

狂顧して南行し、聊く以て心を娯しましむ。
軫石崴嵬、蹇吾が願ひ、
志度を超回し、行きて隠かに進む。
低佪夷猶して、北姑に宿す。
煩冤瞀容して、實に沛として徂く。
愁歎して神を苦しめ、靈は遙かに思ふ。
路は遠く幽に處り、又行媒無し。
道に思ひ頌を作し、聊く以て自ら救ふ。
憂心遂げず、斯の言誰にか告げんや。
抽思

〔通釋〕

結びの辞にいう、長い浅瀬や急流を下り、揚子江の淵を遡ろうと、きょろきょろと左右を見まわしながら南行し、しばらくわが心を樂しませる。角ばった石が高くそびえ、ああ、むずかしいことだ、私の願いをとげることは。はるかに以前の志望や態度を思い起こして、私はやすらかに忠心を行う。ためらいさまよいながら北姑に宿ったが、心はもだえ苦しみ、容貌や態度も乱れ、わたくしは流れ行く川のように、南に行きたいと願う。愁い嘆いて心を苦しめ、私の魂は遥かに郢都を慕い思う。道は遠く僻地に身を置き、その上、わが君との間をとりもつ仲人もいない。道すがらこの歌を作り、しばらくはみずから慰めるが、憂心はとげられず、このことはだれに告げようか。

〈洪興祖補注〉

〈69〉〈長瀨湍流、泝江潭兮〉

湍、亦瀨也。逆流而上曰泝。潭、淵也。楚人名淵曰潭。言己思得君命、緣湍瀨之流、上泝江淵而歸郢也。〔補曰〕瀨、見九歌。說文、「逆流而上曰泝洄。泝、向也。水欲下、違之而上也。」潭水出武陵。一說、楚人名深曰潭。徒含切、又音淫。

〈訓讀文〉

湍は、亦た瀨なり。逆流して上るを泝と曰ふ。潭は、淵なり。楚人 淵を名づけて潭と曰ふ。言ふこころは、己 君命を得て、湍瀨の流に緣りて、江淵を上泝して郢に歸るなり。〔補に曰く〕瀨は、九歌に見ゆ。『說文』に、「流れを逆へて上るを泝洄と曰ふ。泝は、向なり。水下らんと欲するも、之に違ひて上るなり」と。潭水は武陵より出づ。一說に、楚人深を名づけて潭と曰ふ。徒含の切、又音は淫、と。

〈語釋〉

○瀨、見九歌――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻二「九歌章句第二 湘君」に「石瀨淺淺たり（石瀨兮淺淺）」とあり、その王逸注に「瀨は湍なり」とあり、洪興祖『補注』に引かれる『說文解字』巻十二、「水部」に「水流の沙上なり」とある。○說文――『說文解字注』（上海古籍出版社）巻十一「水部」に同文あり。○潭水出武陵――潭水は川の名。『說文解字注』（上海古籍出版社）巻十一「水部」に「潭水は、武陵の鐔成（たんせい）の玉山に出で、東して鬱林に入る（潭水、出武陵鐔成玉山、東入鬱林）」とある。なお、「潭」は王逸注や『補注』に引く一說にあるよう淵の奥深さも意味する。

〈70〉〈狂顧南行、聊以娯心兮〉

狂、猶遽也。娯、樂也。君不肯還己、則復遽走南行、幽藏山谷、以娯己之本志也。一無「聊」字。

〈訓讀文〉

狂は、猶ほ遽にするがごときなり。娯は、樂しむなり。君は肯へて己に還らざれば、則ち復た遽て走げて南行し、山谷に幽藏し、以て己の本志を娯しましむ。一に「聊」の字無し。

〈語釋〉

○狂顧――あちらこちらを見まわしてあわただしく振り返る。なお、『楚辭章句疏證』（上海古籍出版社）によれば、「案ずるに狂の訓は遽、縱放にして拘る無き貌を言ふなり（案狂之訓遽、言縱放無拘貌）」とある。○幽藏山谷――山谷に身を潜めて隠逸する意。

〈71〉〈軫石崴嵬、蹇吾願兮〉

軫、方也。故曰軫之方也。以象地。崴嵬・崔巍、高貌也。言雖放弃、執履忠信、志如方石、終不可轉、行度益高、我常願之也。嵬、一作「巍」。

〔補曰〕軫石、謂石之方者、如車軫耳。集韻、崴音隈。嵬、吾回切。又、崴、鳥皆切。嵬音懷。崴嵬、不平也。一曰、山形。

崴、舊音委誰切。巍音淮。

〈訓讀文〉

軫は、方なり。故に曰く軫は之れ方なり。以て地を象るなりと。崴嵬・崔巍は、高き貌なり。言ふこころは、放弃せらるると雖も、忠信を執履し、志は方石の如し、終に轉がすべからず、行度益さ高し、我常に之を願ふなり。嵬は、一に「巍」に

作る。

〔補に曰く〕軫石は、石の方なる者を謂ひ、車軫の如きのみ。集韻に、崴音は隈。嵬、吾回の切。又、崴、鳥皆の切。嵬音は懷。崴嵬は、平らかならざるなり。一に曰く、山の形と。崴、舊音委誰の切。巍音は淮、と。

〈語釋〉

○軫之方也――『周禮注疏』（十三經注疏）巻四十「冬官考工記」「輈人」に「軫は之れ方なり、以て地を象るなり。蓋は之れ圜なり、以て天を象るなり。輪輻は三十、以て日月を象るなり。蓋弓は二十有八、以て星を象るなり（軫之方也、以象地也。蓋之圜也、以象天也。輪輻三十、以象日月也。蓋弓二十有八、以象星也）」とある。「軫」とは車輿の下基となる材を指す。『說文解字注』（上海古籍出版社）巻十四「車部」に「軫は、車後の横木なり（軫、車後横木也）」とある。なお、本文の「軫石」とは車の横木のように角ばった四角石を指す。ここでは、王逸注にあるように、屈原は放逐されるに至るもなお志を変えることがなかったことに喩えられる。○終不可轉――『毛詩正義』（十三經注疏）巻二 邶風「柏舟」に「我が心石に匪ずんば、轉すべからざるなり。我が心席に匪ずんば、卷すべからざるなり（我心匪石、不可轉也。我心匪席、不可卷也）」とあり、その毛傳に「石堅なりと雖も、尚ほ轉ずべし。席平らかなりと雖も、尚ほ卷すべし（石雖堅、尚可轉。席雖平、尚可卷。）」とある。

〈72〉〈超回志度、行隱進兮〉

超、越也。言己動履正直、超越回邪、志其法度、隱行忠信、日以進也。

〔補曰〕說文、隱、安也。

〈訓讀文〉

超は、越ゆるなり。言ふこころは、己 動やもすれば正直を履み、回邪を超越し、志は其れ法度あり、忠信を隱行し、日に

以て進むなり。

〔補に曰く〕『說文』に、隱は、安なり、と。

〔語釋〕

○回邪――正しくない様。ここでは懐王を取り巻き、屈原を放逐されるに至るまで追い込んだ佞臣を指す。○說文――『說文解字注』（上海古籍出版社）巻七上「禾部」穩に「一に曰く安なりと。禾に从ふ、隱の省。古通じて安・隱を用ふ（一曰安也。从禾、隱省。古通用安・隱）」とある。○隱行――ここでは『補注』所引の「隱は、安なり」という『說文』の訓詁を用いて、安らかに行なうことを指す。

〈73〉〈低佪夷猶、宿北姑兮〉

夷猶、猶豫也。北姑、地名。言己所以低佪猶豫、宿北姑者、冀君覺寤而還己也。低、一作「俳」。

〔訓讀文〕

夷猶は、猶豫なり。北姑は、地名。言ふこころは、己 低佪して猶豫し、北姑に宿る所以は、君の覺寤して己に還るを冀へばなり。低は、一に「俳」に作る。

〔語釋〕

○北姑――王逸注に地名とあるが未詳。『楚辭章句疏證』（上海古籍出版社）にも「今考ふべからず（今不可考）」とある。

〈74〉〈煩冤瞀容、實沛徂兮〉

瞀、亂也。實、是也。徂、去也。言己憂愁、思念煩冤、容貌憤亂、誠欲隨水沛然而流去也。

〔補曰〕瞀音茂。

〔訓讀文〕

瞀は、亂るるなり。實は、是れなり。徂は、去くなり。言ふこころは、己憂愁して、思念煩寃して、容貌憤亂し、誠に水に隨ひて沛然として流れ去らんと欲するなり。

〔補曰〕瞀音は茂、と。

〔語釋〕

○煩寃――『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）巻四「九章章句第四　思美人」に「蹇蹇として之れ煩寃す（蹇蹇之煩寃）」とある。うれえもだえるさま。○沛然――水の流れのすばやいさま。ここでは、水の流れに従い南に行こうと希求するという意。

（75）〈愁歎苦神、靈遙思兮〉

「愁歎苦神」者、思舊鄉而神勞也。「靈遙思」者、神遠思也。

〔訓讀文〕

「愁歎苦神」とは、舊鄉を思ひて神勞するなり。「靈遙思」とは、神遠思するなり。

〔語釋〕

○靈遙思兮――「靈」は王逸注に「神」とあり精神を指し、ここでは「霊魂」が遠く故郷である楚の地に思いをはせるという意。

（76）〈路遠處幽、又無行媒兮〉

「路遠處幽」者、道遠處僻也。「無行媒」者、無紹介也。

〈訓讀文〉

「路遠處幽」とは、道遠く僻に處るなり。「無行媒」とは、紹介無きなり。

〈語釋〉

○無行媒――「紹介」は『史記』（點校本二十四史）巻八十三「魯仲連鄒陽列傳第二十三」に「平原君曰く、「勝 請ふ爲に紹介して之を先生に見えしめんことを」（平原君曰、「勝請爲紹介而見之於先生」）」とあり、その集解に「郭璞曰く、「紹介は、相佑助する者なり」と（郭璞曰、「紹介、相佑助者」）」とあり、索隱に「按ずるに、紹介は、猶ほ媒介するがごときなり（按、紹介、猶媒介也）」とある。つまり、ここでいう「行媒無し」・「紹介無き」とは楚の懐王と屈原を仲介する者がいないという意。

（77）〈道思作頌、聊以自救兮〉

「道思」者、中道作頌以舒怫鬱之念、救傷懷之思也。一無「以」字。

〈訓讀文〉

「道思」とは、中道にして頌を作して以て怫鬱の念を舒べ、傷懷の思ひを救ふなり。一に「以」の字無し。

〈語釋〉

○中道作頌――道すがら「抽思」を作り自らの憂いを解放しはき出すという意。○怫鬱――心が内にむさぼれるさま。『楚辭

補注』（楚辭要籍叢刊）巻十三「七諫章句第十三 沈江」に「心怫鬱として内に傷む（心怫鬱而内傷）」とある。

（78）〈憂心不遂、斯言誰告兮〉

「憂心不遂」、不達也。誰告者、無所告愬也。

〔訓讀文〕

「憂心不遂」とは、達せざるなり。「誰告」とは、告愬する所無きなり。

〔語釋〕

○無所告愬――ここでは懐王に訴えてくれる者がいないこと。

（79）抽思

此章言己所以多憂者、以君信諛而自聖、眩於名實、昧於施報、己雖忠直、無所赴愬。故反復其詞、以泄憂思也。

〔訓讀文〕

此の章の言ふこころは、己の憂ひ多き所以とは、君の諛を信じて自ら聖とし、名實に眩ひ、施報に昧きを以てし、己 忠直と雖も、赴愬する所無し。故に其の詞を反復して、以て憂思を泄らしむるなり。

〔語釋〕

○君信諛而自聖――懐王が佞臣を信じて自らを聖明なる君主であると思いあがること。○以泄憂思也――『毛詩正義』（十三經注疏）巻十七 大雅 生民之什「民勞」に「民の憂ひをして泄らしむ（俾民憂泄）」とあり、その毛傳に「泄は去るなり（泄

去也）」とある。

＊「『楚辭補注』譯注稿（三十六）」に續く。

（本號擔當者…木村剛大・今瀬英一朗・名越健人・曹喆翔・井上黎）